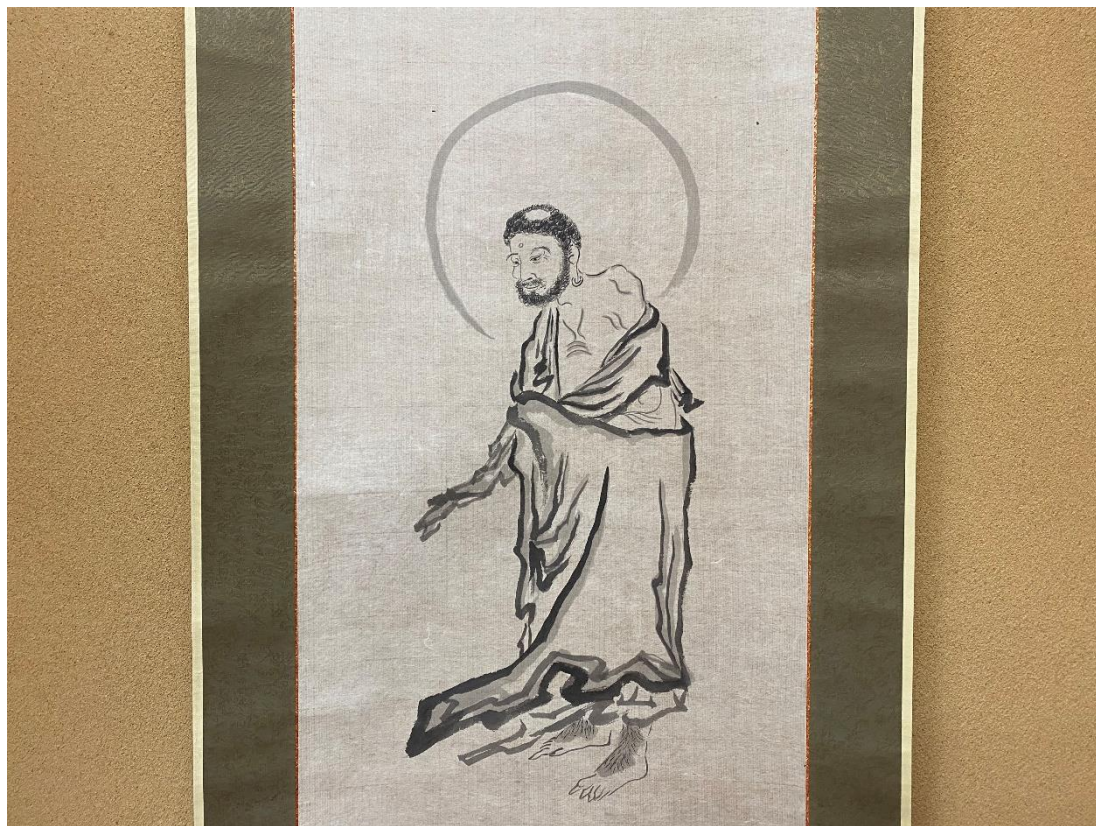


お釈迦さま



苦行を終え、山を下りたお釈迦様の姿

悠久の摂理

住職 松倉 太鋭

近年、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により世界中で多くの尊い生命が失われました。本年に入ってはロシアによるウクライナ侵略等もあり、まさに私たちににとって内憂外患の日々でありました。改めて平穏な生活の有難さを感じている昨今です。

日常生活にはマスクが必需品となり、人と会う機会も減りました。日常で出会った相手の姿かたちを見て、元気そうだったら安堵するものです。人間同士のさり気ない挨拶や会話が少なくなった社会は、味気ないものであることをしみじみと感じます。

日本人は初対面の人や、顔見知りの人に出会った場合はまず挨拶をいたします。この「挨拶」という言葉は禅の古い語録『碧巖録』や『禅関策進』という文献に載っている語句です。

禅語としての挨拶の本来の意味は、「挨」は相手に積極的に迫ってゆくこと。「拶」は相手に切り込んでいくこと。つまり師と弟子が問答することの意味を

もっています。

この挨拶については想い出されることがあります。私共の本山である永平寺でのことです。曹洞宗の宗祖、道元禅師の廟所の承陽殿の配役についた時のことです。早朝、午前一時半に当番は起床して、まず白山水という水を汲んで、湯を沸かします。それからお茶を点て、宗祖に供え大きな声で高祖承大師、二代から五代まで尊名を唱え「不審（ふしん）」と挨拶申し上げます。禅門では不審は挨拶言葉で「御機嫌宜しゅうございますか」という意味です。

それから朝、昼、晩の御勤行（おつとめ）をして夜の九時になったらあらゆる火を消して「珍重（ちんちょう）」と一言挨拶をします。これは「お大事に」「おやすみなさい」の意味でこの挨拶をしてから就寝いたします。

永平寺が建立されたのが寛元二年（一二四四年）ですから、本年まで七十七年その間途絶えることなくこの悠久の摂理を受け継いでいます。

長光寺も文禄三年の開創ですから、四二七年間この摂理は引継がれています。因みに「洗顔」そして

「歯磨き」の衛生習慣を日本に広めたのは実は宗祖である道元禅師なのです。

では「さようなら」という言葉は何なのか一度意味を調べてみました。

武家の時代に入ってから、人に会って「元気ですか」と言葉をかけて、別れる際には「さようならば、ごきげんよろしゅう」と言って別れました。

明治時代に入ると、男性が「さようなら」女性が「ごきげんよう」と掛け合いで言うようになったといいます。現在でも茶道の世界や、伝統ある女子大では挨拶として残っているようです。

昭和に入ると女性も「さようなら」と言うようになって、現在の言い方が定着したようです。

現代社会では人間同士の心の触れ合いをコミュニケーションという言葉が多く使われていますが、コロナ禍の今、改めて挨拶という文化を大切にしなければならぬと思いました。



何気ない日々

副住職 徳允

夏が終わり、秋のお彼岸を迎えた頃、私は体の不調のため少しばかり入院しておりました。

今は手術をして、問題なく回復しておりますが、皆様とお会いできるお彼岸を残念ながら病院で過ごすこととなりました。

手術直後は寝返りを打つだけでも大変な痛みを伴い、起き上がることも非常に辛かったことをよく覚えております。健康の大切さを身にしみて感じました。

何気なく過ごしている平穏な日常は、ありがたく尊いものです。ですが多くの人はそれに気づかずにいます。日常から離れる出来事を体験してようやく、大切さを初めて実感します。

現代は便利なものにあふれています。移動手段や買い物、情報発信など、あらゆるものが容易に行え

ます。

もちろん便利なものを使うことは悪いことではありません。しかし、何もかもが当たり前になりすぎると、日常のありがたさや尊さが実感しにくく、薄れてきてしまいます。

私たちはこの心を大事にしなければなりません。せわしない毎を送る皆様は一度時間を作って、ゆっくりと座り、大きく呼吸し、自分を改めて見つめてみてください。

他者に生かされている自分や、当たり前にあるもののありがたさに気づき、あらゆるものに感謝して一日一日を過ごして生きていけるかと思えます。

皆様もお体には十分お気を付けて、この冬をお過ごしください。



施食会のお知らせ

例年通り五月二十三日に開催予定です。
コロナ禍のため、近くなりましたら開催の有無を手紙やホームページなどでお知らせいたします。随分と間が空いてしまいましたので、今年は開催に前向きに臨みたいと思っております。



ペット供養墓

檀家様のご要望もあり、新しくペット供養墓を建立いたしました。ご希望の方は長光寺にご相談ください。

令和五年 年忌表

一周忌／令和四年
三回忌／令和三年
七回忌／平成二十九年
十三回忌／平成二十三年
十七回忌／平成十九年
二十三回忌／平成十三年
二十七回忌／平成九年
三十三回忌／平成三年
三十七回忌／昭和六十二年
五十回忌／昭和四十九年

編集後記

令和四年もまもなく終わりを迎えます。テレビやネットのニュースを見ていると観光客が多く海外から訪れ、各地が大変にぎわっております。日本各地で笑顔があふれかえるような、素晴らしい年に来年はなつてほしいと心から願っております。

〒一六九・〇〇七三

東京都新宿区百人町一の一五の二

☎ (〇三) 三二〇九・五三六〇

玉寶山 長光寺

